

第145話「属するところ」

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

暮らしの大部分は、

たいした事は起きずに

過ぎた時間の積み重ねで

できている。



そしてたまたま

何か大事が起こる。



事故や災害、
パンデミック
などである。



コロナ禍において

多数の感染者も出たが

もっと多くの人は

罹患しなかった。



報道されたのは

雇った人。



治療や対処法が

話題だから当然だ。



雇らなかった人が、

ニュースになる事はない。



しかし見方を変えれば、

予防の工夫や、有益情報は

そちらにあるのかもしれない。



一般市民が
知りたいのは
そこだ。



コロナ研究がしたいわけではない。



そもそも、何も問題の
起きない社会など作れない。



災害もあれば病気もあり、
巡り合わせの不運もある。



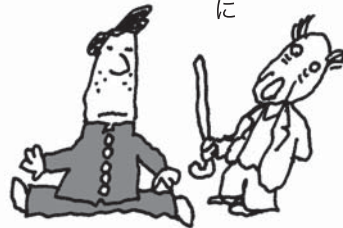
それは普通に生きていけば
誰もが知っている。



私達は
いろいろな事が
起こる世界で、
たまたま
大事が起きずに
済んだ中を生きる。



そんなところに
専門家は
登場したり
しない。



つまり、起きずに済んだことは、
一般市民社会に属している。



そこには様々な工夫や蓄積された智恵がある。



だからもって、その理解を深めるといい。



専門家の説明ばかりに耳を傾けなくていいのだ。



今、世界のあちこちでのキナ臭い戦争も同じだ。一般市民が戦争を始めることはない。



政治家や軍人がそちらに舵を切る。



戦争は専門家に、平和は一般市民に属している。



つまり私達には、戦争を起こさない努力が可能だ。



だからそこに英知と力を結集すべきだ。



とにかく、あらゆることの予防がもって語られて良い。



特ダネにはならないし、
派手な予算も組まれない。



しかし私達はニュースに
なるために生きているのではない。



日常生活に大事件も、
どんでん返しも不要だ。

安心、安全はどこかで
専門家が上手くやってくれる
なんて誤解だ。



むしろ専門家の溢れる世の中に
なったことで、市民が自信を
なくしている。



大きな問題も起こさずに
営まれている市民社会の
メカニズムに、もっと関心を
向けるべきだ。



私達の歴史は、
何も出来ない者のそれではない。



専門家に
依存せず、
自分たちの
持つ力を
信頼することだ。



その上で、起こってしまった事
には、専門家に対応して貰えば
よい。

